

## 「使徒たちに対する迫害 1」

2016年03月19日

**使徒言行録 5章 17節～26節。**そこで、大祭司とその仲間のサドカイ派の人々は皆立ち上がり、ねたみに燃えて、使徒たちを捕らえて公の牢に入れた。ところが、夜中に主の天使が牢の戸を開け、彼らを外に連れ出し、「行って神殿の境内に立ち、この命の言葉を残らず民衆に告げなさい」と言った。これを聞いた使徒たちは、夜明けごろ境内に入って教え始めた。一方、大祭司とその仲間が集まり、最高法院、すなわちイスラエルの子らの長老会全体を召集し、使徒たちを引き出すために、人を牢に差し向けた。下役たちが行ってみると、使徒たちは牢にいなかった。彼らは戻って来て報告した。「牢にはしっかり鍵がかかっていたうえに、戸の前には番兵が立っていました。ところが、開けてみると、中にはだれもいませんでした。」この報告を聞いた神殿守衛長と祭司長たちは、どうなることかと、使徒たちのことで思い惑った。そのとき、人が来て、「御覧ください。あなたがたが牢に入れた者たちが、境内にいて民衆に教えています」と告げた。そこで、守衛長は下役を率いて出て行き、使徒たちを引き立てて来た。しかし、民衆に石を投げつけられるのを恐れて、手荒なことはしなかった。

使徒たちはエルサレム神殿の境内で、あなた方が殺した主イエスは復活し、自分たちは主イエスに教えられた愛に倣って生きており、また、復活した主イエスが病人を癒し、悪霊を追放する救いを与えてくださっていると宣教した。民衆は敬意と賛意を持って取り巻き、聞き入っていた。あなた方が殺した主イエスは復活されたという宣教は祭司長、サドカイ派の人々には受け入れられない争点が二つあった。一つは、主イエスを十字架で殺したことは殺人の罪を犯したと指摘されていることである。もう一つは、復活を否定するサドカイ派の教理に反することである。怒った彼らは立ち上がり、妬みに燃えて使徒たちを捉えて牢に入れた。彼らは罪の有無に関わりなく、問答無用に人を投獄できる権力を持っていた。「ところが、夜中に主の天使が牢の戸を開け、彼らを外に連れ出し、『行って神殿の境内に立ち、この命の言葉を残らず民衆に告げなさい』と行った。」牢の中に、使徒たちの愛と真実を認め、解放して宣教するように味方する人がいたということである。使徒言行録の著者は、その人を「天使」と言っている。牢から出された使徒たちは、すぐに境内に入り、宣教し始めた。どんな妨げにもめげることなく、主イエスの復活の福音を語り続けた。一方、大祭司とその仲間の者たちは最高法院を開いて使徒たちを裁こうと、引き出すために下役たちを差し向けた。行ってみると、使徒たちは牢にいなかった。彼らは戻って来て「牢にはしっかり鍵がかかっていたうえに、戸の前には番兵が立っていました。ところが、開けてみると、中にはだれもいませんでした」と報告した。報告を聞いた神殿守衛長と祭司長たちは、使徒たちはどのようにして居なくなったのかと戸惑った。その時、一人の人が来て、「御覧ください。あなたがたが牢に入れた者たちが、境内にいて民衆に教えています」と告げた。主イエスの名によって語るなど厳命したにもかかわらず、宣教している使徒たちに歯ざしりしただろう。そこで、守衛長は下役を率いて出て行き、使徒たちを最高法院に急いで引き立てて来た。民衆が使徒たちの宣教に敬意と賛意を表していたので、石を投げつけられることを恐れ、手荒なことはせずに連行した。どんなに権威、権力を持っていようとも、大衆の意向には逆らうことはできない。先にペトロ、ヨハネが尋問されたが、二回目の最高法院での裁判が開かれることになった。